

『オレスティア』



上村聡史

サルトル『アルトナの幽閉者』（二〇一四年）、安部公房『要塞』（一七年）と、重厚かつ演劇的熱量に満ちた作品を小劇場で立ち上げてきた演出家・上村聡史が、いよいよ中劇場に進出する。作品は、ギリシャ悲劇隆盛の立役者の一人・アイスキュロスの代表作をもとに、新国立劇場では小川絵梨子芸術監督が演出した『1984』（二八年）の翻案も手掛けたロバート・アイクが執筆した『オレスティア』。復讐の連鎖に取り憑かれた一族の愛憎から、遙か高みに視点を移し、二十一世紀の今も争いを続ける人間世界を俯瞰する戯曲に挑む、その想いを聞いた。

インタビュー◎尾上ぞら（演劇ライター）

んですね。

上村 それに、原作ではタイトルロールであるオレステスは三部作の中盤以降にやっと登場するのですが、アイク版では幕開きから登場し、オレステス自身が記憶を遡りながら物語の全貌を見渡していく構造になっています。オレステスという「個」に対して登場人物たちという「全体」があり、裁判のシーンでは劇場にやってきた観客も巻き込んでそれらの「全体」とも対峙し、個と全体との相互関係から垣間見える民主社会の是非にも想像が及びます。

オレステス役の生田斗真さんには、オリジナル版では子役が演じていた少年時代を含む、全編を演じていただきます。姉が父に殺され、その父を母が殺し、もう一人の姉と共に母を殺すという、血縁の呪縛に取り巻かれた彼に家族はどう見えていたのか、そして世界はどう変わっていったのかまで全て、オレステスの目を通して観客も見ることになります。

——その分、演じる生田さんへの負荷も大きくなりそうです。

上村 大変でしょうね、と他人事のように僕が言っただけかもしれませんが（笑）。内に葛藤を含む大きなエネルギーを抱えながら、自己を、そして世界を見渡し、生の意味と物語の真実を探るオレステスの精神性は非常に根源的で、生田さんになら託せると思っています。

アイク版『オレスティア』は今を生きる俳優が演じてこそ価値がある

——中劇場での初演出。作品選びなどの経緯をうかがえますか。

上村 小川芸術監督から「就任一年目のシーズンに中劇場で上村さんの演出作品を」とお声がけいただいたのは大変嬉しい出来事でした。小川さんは演目の指針として「改めて、物語を大切にする演劇を創っていきたい」と語られ、演劇のルーツであるギリシャ悲劇、それに並ぶ確固とした物語性を持つ翻案作品を手掛けてほしいということで、今回演出を引き受けることになりました。最初にお話をいただいた時点で、アイスキュロスの『オレスティア』は自分の中に確信的に浮かんでいた作品です。

——上村さんは、今作の原作を含め十本のギリシャ悲劇を編み上げた大作『グ्रीクス』の演出も手掛けられています。『オレスティア』に注目したのはなぜでしょう。

上村 ギリシャ悲劇は数多くありますが、トロイア戦争を発端にした將軍アガ멤ノンの一族を巡る、『アガ멤ノン』『供養する女たち』『慈しみの女神たち』の三部作からなる形式で残っているのは『オレスティア』のみ。それを基に、二〇〇四年に新国立劇場でも上演されたユージン・オニールの『喪服の似合うエレクトラ』やテオ・アングロプロスの映画『旅芸人の記録』など、『オレスティア』をベースにした名作がいくつも生ま

ギリシャ劇の胸を借りこのカンパニーならではの「真実」を届けたい

——オリジナルは小劇場クラスの空間で上演されたそうですが。

上村 ええ、ロンドンのアルメイタ劇場という、二五〇席程の劇場だったので、「今、浴室に居たと思ったらもう居間？」という、自由自在に場所を移行できた設えだったのではないかと。そして、今回の日本版は大空間での上演になります。が、逆に先ほどから話している「個」と、「家族」や「国」などの「全体」とがいかに対峙するか、互いの距離が変わり、ドラマが場面ごとに収縮や拡散をする様子が、思い切った構図で見せられる気がしています。最終景の裁判シーンも、たくさんの観客とこの中劇場の特徴でもある半円形の客席形状が、作品世界と相まって、よりスペクタクルに感じていただけたら良いですね。

もう一つ、普通ギリシャ劇では直接殺しの場面は描かれないことがほとんどなのですが、本作品は、実際に殺しの場面が描かれます。特に浴室での殺人シーンは幻想的に描かれていて、あふれだす水や血は、残酷だけでなく、受胎や再生を想起するようなメタファーが含まれるので、演出の見せどころかなとプレッシャーのかかるところです。

——生田さんをはじめ、上村さんと初めて一緒にする俳優の方も多い布陣です。

上村 出自やキャリアもそれぞれながら、手練

れており、一六年に私が劇団昂で演出した『グ्रीクス』も『オレスティア』を含む十本のギリシャ悲劇を構成した作品なのですが、改めてこの『オレスティア』の世界観に深く共鳴することができました。

「国家」から「家族」、さらには「隣人」へと向かう視点の変遷、そして「許し」へとダイナミックに展開する構造。これほど個人と世界の関係を描いたギリシャ劇は他にないなと。ただ、普通に三部作を通し上演するというやり方ではなく、現代に上演する意図を感じる形で上演できないかと考えている中、アイク版『オレスティア』に出会いました。読んでみると、今日的な解釈が加えられつつ、原作を多面的に捉える翻案がなされていて、小川さんにもすぐ賛同をいただきました。

——読んで、人物名などは原作そのままなのに、キャラクター間の感情の行き交いの生々しさ、人の弱さと残酷さ、両面をビビッドに描く筆致に圧倒されました。

上村 アイクは『1984』でもそうでしたが、自分の視点を入れ込みつつも、自身が生きる今の時代と原作の背景とがどういう距離なのかを意識して翻案していると思います。二〇〇〇年以上前の戯曲をなぜ今上演するかは演出者であれば常に問われるところ。近親間での愛憎といった葛藤は今でも普遍的ですが、それが殺人という現象になると、やはり特異なことになるのですが、両者の乖離をアイクは劇中劇の構造を使い、現代性の中に普遍性を上手く取り込んだうえで物語の強度をより確固たるものにし、今を生きる俳優が演じてこそ価値のある戯曲へと仕上げています。

——確かに、その点で非常に戯曲らしい戯曲だな

れの方ぞろい。この皆さんからギリシャ劇の台詞がどう発され、いかに観客に届くかは僕自身も興味深いところ。翻訳の平川大作さんと戯曲の改訂を重ねているところですが、台詞というものはある種の「詩」で、だから「詩」の持つ響きを伴って伝えることが大事だと年々思うようになってるんです。その点、今回は言葉を「詩」として届けられる人に集まってもらえたのではないのでしょうか。また翻案されているとはいえ、原作の壮大さを感じる長台詞が随所にあるので、それをこのメンバーと一緒に作れるのは楽しみです。

どんな作品でもつくる時に思うのは、「お客様に真実を持ち帰ってほしい」ということ。そのため戯曲に深い考察を巡らし、カンパニー全体でこれだというものを稽古の中で発見し、積み上げていく。そして、作り手とお客様が一体化する時に湧き上がる想像の沸点というべき「真実」。その「真実」は、共感なくしてはなりえないのですが、今回は二五〇〇年以上に亘り人間を描き、私たちを魅了し続けるギリシャ劇の胸を借り、このカンパニーならではの「真実」を届けたいと思います。

